講演会

「幕末の江戸から学ぶ今の東京」

講師　江戸東京博物館
館長　竹内　誠　氏

◎講師紹介

東京教育大学大学院博士課程修了、文学博士、江戸文化史・近世都市史専攻、『江戸社会史の研究』『寛政改革の研究』『徳川幕府と巨大都市江戸』『相撲の歴史』『江戸は美味い』『江戸談義十番』など著書多数

現在東京学芸大学名誉教授、日本博物館協会顧問（本年六月まで会長）、徳川林政史研究所所長、NHK大河ドラマ等時代劇の考証を担当、平成十年から江戸東京博物館館長

◎講　演

1　上野の「お山」

野村会長さんからのお話で、講演会場が上野精養軒とお聞きしたとき私はとってもうれしく思いました。

実は、私は旧制中学の最後でございまして、昭和二十一年四月に、上野のお山の都立上野中学（旧東京市立二中）を受験して入学しました。しかし翌年から日本の教育制度は大改革が行われ、中学校までが義務教育となったため一歳年下の人びとは新しく出来た新制中学に通うようになり、私どもが中学二年になっても下級生は入ってきませんでした。

学校の名前も、新制都立上野高等学校併設中学校と変わり、高校へは試験なしでそのまま上がっちゃったんです。偶然ですが公立の中・高一貫教育をうけたことになります。

こうして、私は昭和二十一年から昭和二十七年まで、この上野のお山に下町から通っておったわけであります。電車で言うと二十一番という都電に乗りまして、上野駅を降りまして地下道を通ります。当時、地下道にはたくさんの家を失った方々、お子さん方が大変な臭気の中、不衛生な中、その中を通っていきまして、上野のガード下で地上に上がりまして、そして上野の裏側の急な坂を、今で言うと公園口まで上がっていきまして、竹の台グラウンドというものがございました。そして右側にずっと塀がありまして、なぜ塀があったか思い出したら、戦争中は高射砲陣地があって、一般の人に見せないために高い塀がありまして、今はちょうど国立博物館の前の大きな噴水のある所は全然見られませんでした。

美術館の脇を入って、二本杉原を通ってまだ芸大とは言わず美高と言っていましたが、そこを通ってぐるっと左へ回ると大黒天があって、「東叡山の丘の上、そそりて立つはわが母校」に着きます。ここは東叡山でございますが、そういうふうに六年間戦後の矛盾が集約された上野のお山に通いました。

先ほど言いましたように家を失なった人びとが大勢生活していましたし、夜になるとあやしい者たちが横行するなど治安の悪い所でした。

西郷さんの銅像の所に立ちますと、上野の広小路に闇市がずっと並んでおりまして、本当の学生さんかどうか分かりませんが、あのころは座布団帽子をかぶると大学生というイメージで、三角ピーナツという物を売っておりました。三角形のセロファン紙ですから、角にすきまができて、豆数は少ないのにたくさん入っているように見えるという物を売っておりました。

松坂シネマという、松坂屋にあった映画館は、戦前の洋画を上映していました。上野日活は、山

を下りたすぐにあり、ここは割合大衆的なものをやっておりました。私は時々エスケープといいまして、午後の授業に出ないで、こんな悪いことを言ってはいけないのですが、松坂シネマへ行ったり、上野日活ではターザン映画やアボット・コステロという「凸凹コンビ」の映画を見た。そういう、まさに青春の一ページが上野にはありました。

その後私も適齢期になりまして結婚ということになりました。今から四十七年前のことでありますが、五月三十日にまさにこの上野精養軒のこの会場で、結婚披露宴をやったということで、今感激しております。そういうわけで、いろいろ思い出が多いわけでございますが、上野のお山でお話をさせていただく幸せを与えてくださいましたことに感謝しております。

2　私の東京再生論

皆様方は私の大先輩、つまり東京都の行政にいろいろと携わられてご苦労なさった方々ですから大変、おこがましい話ですが、私は江戸から考えると、こんなことが少しは東京再生に役立つのではないかという個人的見解をこのレジメに四点書かせていただきました。

①歴史的地名を大切に

一つは、歴史的地名を大切にということでございます。皆さん方にもこれはご同意いただけると思いますが、あまりにも行政が地名を勝手にいじってしまって、北上野とか西浅草とか東銀座とか、銀座と上野と浅草があればいいというものではないですが、全部それに集約しようとしました。たとえば西浅草には、柴崎町という地名があった。元は芝崎村といって江戸城の近くにあった村ですが、それが浅草に移ったのですが、それでも芝崎という地名がある限りその歴史がわかるのですが、西浅草なんて言われちゃうと、何がなんだか分からなくなってしまう。黒門町という名前もなくなりました。黒門というのも、とても意味があるわけです。

そういう点で、郷土を愛せとか地域を愛せといくら言っても、その歴史が分からないのでは愛しようがありません。地名を聞いて呉服町とか何とかと言えば、「ああ、そうか。昔はこういう所だったな」ということがすっと分かるわけです。

この間金沢市長に会いましたが、十幾つの地名を復活したんです。飛梅（とびうめ）町とか主計（かずえ）町とかいい名前になっております。

東京も直そうと思って中央区長に言ったら、「じゃあ、検討してみてください」というので、何年か前に中央区地名検討委員会をたち上げて検討したんですが、結局、一つも元に戻すことが出来ませんでした。一人でも反対なら変えないという方針でしたから。

東日本橋というのは実は両国橋のそばにありますが、なぜ東の日本橋なんだということですが、地元出身の方々は変えてもらいたいと。薬研掘（やげんぼり）とか、いい名前があるわけで、薬研掘のお不動さんはとても有名でした。今は、東日本橋のお不動さんといってもどうしようもないわけで、三越の東隣りにあるのかなぐらいしか思わなくなってしまいます。

それで変えようと思いましたが、十パーセントの新しい住民は、やはり東であろうが北であろうが、日本橋というのはブランド品といいますか、その地名で取引がうまくいっているんだということを聞きますと、「もっともですね」ということで変えませんでした。

中央区のなかでも旧京橋地区の町名は昭和四十何年かに一斉に町を取ってしまったんです。湊町は湊になり、新富町が新富になりました。

ただし明石町だけは明石になりませんでした。そこに一人頑迷固陋のおじいさんがいまして、頑として町は取ってはならぬと。明石町は明石では

駄目だと言って、行政に歯向かいました。とうとう、そこだけは例外として今日にきたんです。

どうしてかと理由を聞きましたら、鏑木清方（かぶらぎきよたか）の「築地明石町」という、皆さんご存じの見返り美人の名画がありますね。やはりあれは、明石だと兵庫県へ行っちゃうわけです。やっぱり江戸らしいというのは築地明石町、これは明石町に意味があるので、明石になってしまっては何の意味もないと言って頑張ったのです。

その当時、みんなが町名を変えようというのに、一人頑張っているので相当非難ごうごう受けたと思いますが、今になると今度は新富町の人が新富になったのは失敗した、町を付けたままの方がよかったのにという話なのです。

なかなか、歴史というのは難しいものですね。少数意見といいますか、それはたいてい悪いほうに回されて、大勢の人が大きな声でわーわー言っていれば、そっちが善玉になってしまうのですが、二十年、三十年たったとたんに、みんなが「あのときは失敗だった」と言う。この辺が、皆様方も行政に携わられて非常に苦労なさったと思います。どこをポイントに当てて考えるか。今はこうでも将来どういう評価をされるか、非常に難しい問題だと思います。

いずれにしましても、無理に行政町名は元に戻さなくてもいいけれど、「元ここは何という町だった」ということを、行政自身が住民に積極的にPRしていく。そして地域を愛し、町を愛するという一つの方法として歴史的地名を大切に、というふうに思っているわけです。

②隅田川を活かす（東京スカイツリー）

二番目に、隅田川の沿岸は今スカイツリーができるというので大変な人気です。このスカイツリーができたということを、きっかけにして隅田川を活かす。隅田川がちょうどセーヌ川とか、テムズ川のようになったら、東京の下町はすごく再生されるのではないか。現在江戸博で隅田川展をやっておりますが、その意図は、江戸の隅田川の美しさを皆さんに知っていただき、かつてはこうだったと、今はどうしましょうという提案をしているつもりであります。

東京スカイツリーと隅田川

川というのは、そこが生きてくるといろいろなプラスがございます。観光だけではございません。やはり水辺は人をいやしますし、心をいやすものがあります。また江戸時代からずっと昭和二十年代までは、ぽんぽん蒸気、一銭蒸気ともいいますが、水上バスが走っていて、人、物を輸送していたんです。車社会になってしまってから、川は捨てられるというか置き忘れられておりますが、やはり隅田川をどうするかということを考えていただければと思っております。

私は、下町スクエアゾーンという考え方を持っております。スカイツリーができますと、全国から人が集まります。そして、世界からも人が集まってきます。当然のごとく川を渡って浅草へ。外国人に、「東京で一番行きたい所は」と聞くと浅草です。当然この流れはできます。しかし、そこだけで終わらせてしまっては、墨田区にとっても台東区にとっても具合が悪いの

ではないかということで、もう一つ秋葉原、アキバと言っていますが、あのアキバが今は外国から来る方々が見る第二位です。

そして、わが両国。伝統ある国技館があるわけですが、江戸東京博物館も開館十七年を迎えておりまして、何とかその地位を確保するためには、スカイツリー、浅草、アキバ、両国。そして、真ん中の中央通が隅田川である。中央通である隅田川を水上バスが行き来する。スカイツリーからアキバに来たり、浅草から両国に来たりということで、すでに東京都は「ぐるっとバス」といって、陸上で今のコースを回るのはできておりますが、それを水上でもやるということであれば、かなり活性化するのではないかと思っております。

③日本橋に空を

次は、「日本橋に空を」ということですが、これは申すまでもありません。日本橋というのは、何も日本橋地域の人のエゴではございませんで、あれは江戸時代以来、江戸の中心というだけではなく、日本全国の中心ということで、今も昔も里程を測るのに、日本橋から何里（キロ）という日本の起点に位置しています。

木造の日本橋（江戸末期）

今もそうですから、その大切な橋は東京の顔であり、日本の顔が日本橋なのです。その橋が橋でなくなってしまった、トンネルになってしまったということで、あの上に高速道路を載せたことは、かつての大変な観光地であった所に今は誰も寄り付かない。あそこにわざわざ観光に行こうという人はいません。そういう点で、これは何とかしたい。

昭和三十九年のオリンピックの際にああなったのですが、そのときはそれで一定の役割を果たしたわけです。日本の場合は公と私ということが大変難しい。私権がものすごく強い。従って、公的な事業をやるときに、私権を大切にするがゆえに、それではということで、川の上に高速道路を走らせることが一番簡便でありますから、どうしてもそうならざるを得なかったわけでしょう。この辺が、今後のいろいろな問題でも、絶えず公と私という概念は難しい問題として残るわけです。

私は、できれば日本橋の上だけの高速道路ではなくて、都心の首都高速道路すべてを取り払いたいと思っています。ある一つの都市内の、A点からB点へ急いで行くという高速道路の概念はほかの国にはないのです。東京というのは、巨大なるがゆえかもしれませんが、A点からB点へ急いで行こうと。でも、決して今は急いで行こうとする人は上に乗りませんね。首都高速といっても、実際は高速ではないんです。

高速道路の本来の意味は、A都市からB都市へ急いで行くという話なので、同じ都市の中で川の上を走るから余分に蛇行して走っていますね。まっすぐ行けばいいのに、ずーっと川通りに動いていきますから、都市景観としても難しい。これからは、むしろ全体的に首都高がなくても可能な交通体系があり得るかどうか。バイパスとかいろいろなことの発達で、改めて考えなければいけない問題だろうと思っています。

④江戸城の再建（天守・松の廊下・大奥）

最後に、江戸城の再建というのは夢みたいな話で、いろいろクリアしなければならない難しい問題がございますが、現在の皇居の、今すでに大手

門から開放されている地区です。あそこに天守台の跡がありますが、あそこへ天守閣を建てて、天守閣だけでは駄目なので、松の廊下をそっくりに復元することは可能です。江戸城大奥も可能です。江戸城といって見たいのは、もちろん外から天守閣を見たいということはあるでしょうけれど、大体は松の廊下とか、本当に歩いていただいたら面白いと思うのです。「ここが浅野が吉良に切りかかった場所か」とやると感激しちゃうわけです。それから、大奥の所へ行けばさらにいろいろと分かる。そういうものを造ればいいなと。

これは非常に比喩的な言い方ですが、一六五七年に火災で江戸城の天守閣が焼けて、それ以後、ずっと建っていないのです。四〇〇年たったときに、突然天守閣が現れるのがいいなというのが一つの理想であります。四〇〇年というのはちょうど二〇五七年で、今から四十七年目です。私が一二四歳のときに建つ。交友会に入っている方は、ご長命ですから大体ごらんになれると思います。そういう夢を持っております。

先ほど言いましたように下町ゾーンのシンボルタワーはスカイツリーです。それから、千代田区・中央区のセントラルゾーンのランドマークは今申し上げました天守閣です。そして、山の手ゾーンのランドマークは今ある東京タワーであります。そして、もう一つのゾーンは湾岸ゾーンといいますかお台場ゾーンで、そのシンボルはレインボーブリッジ、あるいは将来あそこに突然でっかいものが建つかもしれません。

東京全体が幾つかのゾーンに分かれてそれぞれ特色を持って、観光としての機能も果たせるようにする。「千客万来、世界都市東京」という観光政策を都は非常に大事にしておりますから、各ゾーンでそれぞれが特色を発揮する。そして、そのゾーンがネットワークを作ったときに、やはり一つの東京というものの特色、魅力あるものが生まれてくるのではないかと。以上は全くの私見でありますが、江戸から私が発想した東京再生論であります。

それでは具体的に、東京の前身の江戸について、以下四つの観点から述べたいと思っております。

3　美しい景観都市―自然との共生―

第一は、美しい景観都市という言葉を挙げておきました。幕末に来日したロバート・フォーチュンというイギリスの園芸学者がおります。草花の研究家でございます。この方が東京の前身の江戸を見て次のように言っております。

a 江戸は不思議な場所

> 江戸は不思議な所で、常に外来人の目を引きつける特有のものを持っている。江戸は東洋における大都市で、城は深い堀、緑の堤防、諸侯の邸宅、広い街路などに囲まれている。美しい湾は、いつもある程度の興味で眺められる。城に近い丘から展望した風景は、ヨーロッパや諸外国のどの都市と比較しても、優ると

> も決して劣りはしないだろう。それらの谷間や樹木の茂る丘、亭々とした木木に縁取られた静かな道や常緑樹の生垣などの美しさは、世界のどこの都市も及ばないであろう（フォーチュン『幕末日本探訪記』）

不思議なことに、石垣には驚いていないんですね。なぜかというと、外国人は石の文化で、大体石というものには驚かないのです。逆に緑と土というか、緑の堤防というのは鉢巻土手と僕らは言いますが、石垣ではなく土手なのです。そこに松が生えていて、それをぱっと見て美しいと。

日本人は大体お城へ行くと石垣ばかりみんな見ます。そして、それに感動します。しかし、フォーチュンはそれには感動し

ていない。

それから、諸侯の大邸宅がいっぱいありますので、そこの美しさ。それから、街路が意外に広いということです。ちまちましていないということで、幹線道路は非常に広かったということです。

美しい湾、これは江戸湾のことですが、いつもある程度の興味で眺められると。「城に近い丘（山の手）から展望した風景は、ヨーロッパや諸外国のどの都市と比較しても、優るとも決して劣りはしないだろう」と言っております。つまり、江戸の山の手台地から見て下に下町があり、そしてその向こうに江戸湾があり、帆掛け舟というか船が浮かんでいる。その風景の美しさに感激しております。

幕末に来た外国人がそれぞれの自分が体験した国の都市と比較して、江戸が世界一美しい都市だというふうにここに述べているわけです。

b庶民も生来の花好き

日本人の国民性のいちじるしい特色は、下層階級でもみな生来の花好きであるということだ。気晴らしにしじゅう好きな植物を少し育てて、無上の楽しみにしている。もしも花を愛する国民性が、人間の文化生活の高さを証明するものとすれば、日本の低い層の人びとは、イギリスの同じ階級の人達に比べると、ずっと優って見える。

（フォーチュン『幕末日本探訪記』）

フォーチュンは、同時に日本人の特色についても言っております。

ガーデニングの家元、イギリスからまいりまして、日本の庶民階級がいかに花を愛し草花をいつくしんでいるか。これは人間の文化生活の高さ、つまり日本の江戸の庶民の暮らしぶりは、まさに非常に高い文化生活をしているという認定をいたしております。

この自然を愛する心持というのは、本当に緑いっぱいの都市にしようというものにつながっていきますが、種を植えて水をやり、さらに芽が出てくるということで時間がかかるわけです。花になるまでには、大変時間がかかるわけです。それをしっかりと時間の経過を楽しみながら、そして春には春の、夏には夏の、秋には秋の草花というふうに計画的に、狭い庭であってもそれを楽しんでいるという姿は、私は現代人と江戸時代人との明確な差を示していると思います。

現代は資本主義社会でありますから、当然「時は金なり」、（Time is money.）で動いております。ぼーっとしているともったいない、無駄だということで、第一こういうところで私のつまらない話をお聞きになっているのは大変無駄なわけで、今株は刻々と動いておりますし、ドルもどうなっているか分かりません。分・秒を競う世の中です。

というわけで、資本主義というのはそういうもので、われわれはそういう生き方をせざるを得ない状況にあるわけです。自然を楽しむことは時を楽しむということで、時間の管理概念が徹底的に違うのは、江戸時代人は時に追いかけられておりません。ちゃんと自分の自主的な判断で、しっかりと自然の移ろいを味わいながら過ごしております。

日本人が捨てたものじゃないと思うのは、今でも街を歩いていますと、フォーチュンが見たこういう風景がいっぱいありますよ。路地などには自分の楽しみなのか、狭い所を通る人をいやすためなのか、ちゃんと植木を植えておりまして、夏などには釣り忍、あるいは風鈴などで楽しむ。これは、自分だけが楽しむのではなくて、人様を楽しませるということで、こういう気持ちというか自然というのはいいなと。自然との共生というのは、そういう点で人との共生とつながっていく問題だろうと思っています。

cモース「日本その日その日」

もう一つの例は、モースという人が明治十年に日本にまいりました。エドワード・モースが有名なのは大森貝塚を発掘して、日本に初めて科学的な考古学を導入した人としてです。東大で生物学、動物学の講義をしていました。

この方も、日本人の他人への思いやりのようすとか、自然を大切にすることとか、相手に絶えず気を配っている日本人の姿をいろいろ書いてくれております。その一つが左に引用した文でございます。

> 街路や小さな横丁等は概して撒水がよく行われている。道の両側に住む人々が大きな竹の柄杓で打水をしているのを見る。東京では水を入れた深い桶を担い棒でかついだ男が町を歩きまわる。桶の底の穴をふさぐ栓をぬくと、水がひろがり迸り出る。一方男はなるべく広い面積にわたって水を撒こうと、ほとんど走らんばかりにして行く。（モース『日本その日その日』）

日本人の打ち水の習慣に感心しています。そして役所に雇った人も水をまいている様子が記されています。

実は、これは江戸時代にもあったのです。江戸時代も町で雇って、散水車が今はありますが、車のない時代には天秤棒に桶を担いでそこに水を入れて、穴から水が出るようにして、急いで走っていくとばーっと水が道路にまかれるわけです。これは江戸からありますが東京でも、公も金を出して水をざーっとやっている。個人も打ち水をしている。町自体が、いつも非常にきれいなのです。

江戸東京博物館の十周年記念で、記念講演に永六輔さんを呼んでお話をしてもらったときに、永さんが子どものときの体験談をお話になられた。自分の家の前を夏休みだったので「よし、ひとついいことをやろう」ということで、道をきれいに掃いたそうです、朝早く起きて。

そうしたら、向こう側のおじさんが怒ってきたと言うんです。「おれは毎日やっているんだ。おれの楽しみをうばうな」ということで、人の家までやるなと文句を言いに来たというので、翌日にしょうがないからちょうど道の真ん中のところまで、向こうのおじさんのためにそれは取っておいて、こちら側だけやったらまた怒りに来たと言うのです。「おまえは、なんでまん真ん中で止めるんだと。そこのところの二メートルぐらい、「一間ほどは余分に相手側の分まで掃除するのが礼儀というものだ。わたしは、毎日お前のところを一間ぐらい余分にやっているんだぞ」と（笑）。

それはなぜかというと、人が通る道路の真ん中が二度掃きといいまして、一人がやってもう一人がやると、二度掃きになってきれいになるだろうと言うわけです。そういうことから、おじさんから町の道はみんなの道ということ、そして人々が気持ち良く道を通れるように迎え入れるということを学びましたとおっしゃいましたが、それはまさに江戸の心だなと思っております。

4　あふれる行動文化の都市

美しい景観も、温かい人々の気持ちも大切ですが、その結果どういうことになるか。しーんとした静かな町というのも、お屋敷街はそれで結構ですが、どこもかしこも静かというのはないわけで、とにかくやはり人が行動してくれて、人が金を落としてくれるという、つまり内需がないと都市はしょうがないんです。東京も盛り場あるいは商店

街とか、そこが絶えずにぎわっていてくれなければ困るわけです。江戸時代にはすでにそういう仕掛けがありまして、名所がたくさんありました。

歌川広重の江戸名所百景というものがありますが、これはきれいな美しい所という書き方もしているわけですが、同時に、その結果それを見に来る人もたくさんいるという名所・旧跡は同時に観光地でもあったわけです。

そういう所がたくさんあったようで、四番のあふれる行動文化の都市ということです。この行動文化という言葉は、私の恩師の西山松之助先生が作った言葉です。

文化というと、絵画とか書とか音楽といったことに限定されそうですが、人間は行動する、その行動自体が文化だと。特に典型的なのがお芝居を観に行くとか、名所・旧跡に行くとか温泉に行くとか、そういうことが江戸時代に盛んに行われた。ある程度余裕がなければできませんが、それを行動文化と言うわけです。ですから、物見遊山も一つの文化だということです。今日でも観光といえば、やはりそれは文化なのです。

それは行動文化ですが、こういうことであります。江戸では長屋のおかみさん連中も、あるいは長屋に住んでいるような職人さんたちも、結構そういう余裕があったらしくて、名所・旧跡に行くということをさかんにしていました。

普通今までは、女の人は江戸時代はかわいそうだった。虐げられていて、というふうに一般的に考えられてきましたが、どうも『世事見聞録』という江戸時代の資料を見ますと、江戸時代の後期になりますと、結構奥さん方も元気だったという資料です。これは、私が作った文章ではなくて『世事見聞録』というのですから、内容についてのご批判はそちらの著者に言って、私には言わないでください（笑）。

> 夫は未明より草履・草鞋にて棒手振り（ぼてふり）などの家業に出るに、妻は夫の留守を幸ひに、近所合壁の女房同志寄り集まり、己が夫を不甲斐性者ものに申しなし、（中略）或は芝居見物そのほか遊山物参り等に同道いたし、雑司ケ谷、堀の内、目黒、亀井戸、王子、深川、隅田川、梅若などへ参り、またこの道筋、近来料理茶屋・水茶屋の類沢山に出来たる故、右等の所へ立ち入り、又は二階などへ上り金銭を費して緩々休息し…（世事見聞録）

長屋というところは、けんかをしないことが大原則なのです。だって、トイレが共同でしょう、井戸が共同でしょう。ごみだめとか、全部いつでも外へ出ないことには果たせない。そうすると、けんかしちゃって家にこもっちゃったら生活ができないわけです。

ですから、井戸端会議の会話一つでも気を遣っているのです。長屋のかみさん連中がものすごくお互いが気を遣っているのです。迷惑を、お互いが掛けないように。でも、もし迷惑が掛かったときはお互い様だからと。きょうは隣りの夫婦がうるさいと思うけれど、うちも、よく夫婦げんかをするねと。これは我慢しようということです。

そういう会話から、「或は芝居見物そのほか遊山物参り等」におかみさん連中が行くんです。

江戸には、名所がたくさんありました。雑司ケ谷、堀の内、目黒、亀戸、王子、深川、隅田川、梅若など。雑司ケ谷というのは、鬼子母神さんで有名なのです。堀の内は御租師さん、日蓮さんです。目黒といえばお不動さんです、目黒不動。五色不動と言いまして、全部色なのです。目黒、目赤、目白、目青、目黄といっ

て全部色です。今、地名で残っているのが目黒と目白。

（編集部注　江戸五色不動　目白不動（東豊山新長谷寺、文京区関口二丁目）、目黒不動（泰叡山瀧泉寺、目黒区下目黒三丁目）、目赤不動（大聖山南谷寺、文京区本駒込一丁目）、目黄不動（牛寶山最勝寺、江戸川区逆井一丁目、永久寺、台東区三ノ輪二丁目）、目青不動（竹園山教学院最勝寺、世田谷区太子堂四丁目）

それから、亀戸は天神さん、亀戸天神です。王子はお稲荷さん、深川は八幡さんです。隅田川と梅若、これは隅田川地域にありますが、まさにスカイツリーの建つ真下のあの辺りにたくさん名所・旧跡があったのです。隅田川沿いに三囲（みめぐり）神社とか弘福寺とか、そういうものがいっぱいあったわけです。そこへ行きました。

「またこの道筋、近来料理茶屋・水茶屋の類沢山できたる故」と、結構グルメなのです。信仰でお寺などにお参りに行きますが、必ずそこには見世物小屋があったり、あるいはおいしい物を食べさせる。長命寺の桜餅とか……があるわけです。ここに、料理茶屋や水茶屋があった。

「右等の所へ立ち入り、又は二階などへ上り金銭を費して緩々休息し…」と。この間旦那は一生懸命「いも、ごんぼ」と売って歩いているのです、汗水たらして（笑）。長屋の女房同士は、数人連れ立っておいしいところへ行って食べているのです。これは、江戸時代の話で今の話ではないのです。

こういうことが行われていたとすれば、なるほど、都市は活気にあふれますよ。私は、これを非難するために出しているのではないです。男も参加したし、女も参加した。こういう行動文化が町の中に充満していたということは、これは内需拡大でありまして、都市江戸としての機能が発揮されていたということです。ましてや江戸人だけではなくて、江戸には地方から観光客がわんさと来ましたから、魅力ある町だったということです。

5「お互いさま」の都市
―人との共生―

次に、人との共生を明確に示した文章を紹介します。

先ほど言いましたエドワード・モースです。彼は通算二年半ほど日本に滞在しまして、『Japan day by day』という記録を残しております。そこに、彼の日本人論が展開されています。

(1) ゆづりあい　共生の心

まず、第一に彼は東大ですから本郷で講義をしました。たぶん、大森貝塚に行くには新橋ステーションから汽車に乗って、発掘現場に行くということが多かったのだろうと思います。本郷から新橋までは人力車を利用したようです。その人力車に乗ろうとして近付いたとき、人力車夫たちの行為にモースは敬服したのです。アメリカの辻馬車屋の行為を思い出したからです。

a 人力車夫

大学を出てきた時、私は人力車夫が四人いる所に歩み寄った。私は、米国の辻馬車屋がするように、彼等もまた揃って私の方に駆けつけるのかなと思っていたが、事実はそれに反し、一人がしゃがんで長さの異なった麦藁を四本ひろい、そして籤を抽くのであった。運のいい一人が私をのせて停車場に行くようになっても他の三人は何等いやな感情を示さなかった。汽車に間に合わせるためには大いに急がねばならなかったので、途中、私の人力車の車輪が前に行く人力車の轅（ながえ）にぶつかった。車夫たちはお互いに邪魔したことを微笑で詫び合った丈で走り続けた。私は即刻この行為と、我が国でこのような場合に必ず起こる罵詈雑言とを比較した。何度となく人

> 力車に乗っている間に、私は車夫が如何に注意深く道路にいる猫や犬や鶏を避けるかに気がついた。
> （モース『日本その日その日』）

アメリカの場合、辻馬車屋が何人か客待ちしていたら、モースが近づいていくとわーっと、競争社会ですから争い競って、相手をすっ転がしてでも客を確保しに走ってくる。日本人の人力車夫も同じようにするのかと思ったら、道に落ちていた麦わらで、長いのが当たりか短いのが当たりか分かりませんが、「お前引け」「お前引け」とくじを引き、くじに当たった車夫がモースを乗せた。

これならけんかなしです。まさに生活の知恵でありまして、こういう知恵が日本人にあることに驚いているわけです。知識ではないのです、知恵なのです。人と共存するにはどうしたらいいか、くじ引きというのは意外といいんです。あれは、幼稚なようですが、お困りになったときには絶対にくじ引きが一番いいです。公明正大ですから、みんな天の声とあきらめて素直に従うわけです。

だから、この場合も「ちぇ」とか「おまえ、うまくやりやがったな」なんていうことはいわない。そう言われると乗ったお客さんは気分が悪いですから。誰も、不快の念を示さなかったということです。

そして、「汽車に間に合わせるために」、つまり急いでくれということで大いに急がせたのです。「途中、私の人力車の車輪が前に行く人力車の轅（こしき）」つまり車軸受けにバーンとぶつかりました。しかし「車夫たちはお互いに邪魔したことを微笑で詫び合った丈で走り続けた」と。

いいですか、後ろからバーンとぶつかったんだから、当然前の車夫が引っ張るのをやめて、「このやろう」とやるはずですね。そうすると、後ろの者は「いや、おまえが路線を変更した」とか「急停車した」とか、何か言い分が必ずあるわけですから、そこで喧嘩が始まるはずです、客を放っておいて。それがないんですね。ぶつかった瞬間に、お互いにじゃましたことを、しかも微笑み合いながら「失礼しました。ごめんなさい」と両方が同時に言ってすっと別れた。

モースは「即刻この日本人の行為と、我が国（アメリカ）でこのような場合に必ず起こる罵詈雑言とを比較した」と。必ず、「このやろう」「ばかやろう」と言って喧嘩が始まるんだ、アメリカではと。

思うに、現在の日本もかつてのアメリカだなと思いますね。わたしは、二度経験があります。タクシーに乗っていてぶつけられると、ぶつけられた運転手がまず怒りに出て行きます。そうすると、後ろの運転手が「おまえが」路線変更とか、急停車だとか、さっきの話で。絶対にお互いが謝らないのです。客は、ほってきぽなしですよ。

あるときに、タクシーで「あなた方はどうしてそうなんですか」と聞いたんです。そうしたら、「ごめんなさい」と言うと、法律的にもうそれが負けなんですって。「ごめんなさい」と言ったということは自分の非を認めたと、先に言ったほうが負けなのです。裁判というのはそういうところを細かに検証して、「おまえは悪いとそのとき思ったんだな」ということになる。

法律というのは、いいようで結構人間を悪くするのです。法律があるから、わたしたちは謝らない。怖いですね、そういうことで、人間がどんどん悪くなっていくのです。本当の心と心の付き合いが、堅い法律が間に入ってくるとできなくなる。

さらにモースの文を読みますと、「何度となく人力車に乗っている間に、私は車夫が如何に注意深く道路にいる猫や犬や鶏を避けるかに気がついた」とあります。あのころ、チューブがあるわけで

はないから、かなり乗り心地の悪い鉄の輪で、それで「あらよ」と言ってスピードを出して行ったら、あのころは道にいっぱい犬や鶏がいたから、たまには生き物をひき殺したはずです。そのひいたのを見たことがないというんです。人に優しい人は、やはり生きとし生けるものすべての動物にも優しいという、その車夫たちの心根にもモースは感心しています。

人力車（明治初年）

b川開き

もう一つ、モースは五月二十八日に両国で川開きに行きました。花火が上がるということで、ぜひ一番いいのは橋の上よりも、あるいは土手よりも船で行くことだと。屋形船で行きました。行ったところ、みんないい位置取りをしたいために、船が押し合いへし合いでぶつかったりして、大変な騒ぎだった。当然アメリカではこういう場合に、必ず罵声が飛ぶけれど日本の花火見物ではそれが聞こえてこなかったというのです。

> 私は『河を開く』というお祭りに行った。（中略）船頭達は長い竿で、船を避け合ったり、助け合ったりしたが、この大混雑の中でさえ、不機嫌な言葉を発する者は一人もなく只『アリガトウ』『アリガトウ』或は『ゴメンナサイ』だけであった。かくの如き優雅と温厚の教訓！而も船頭達から！何故日本人が我々を、南蛮夷狄と呼び来たったかが、段々に判って来る。
> （モース『日本その日その日』）

つまりモースは、文明の国から野蛮な国日本、発展途上国どころか、まだ発展もしていない国へやって来て、お雇い外国人としていろいろ教えようとして来た。ところが、何のことはない、日本人の方が余程ジェントルマンではないかと。日本の車夫さんや船頭さんとくらべると、われわれの方が野蛮人といわれても仕方がないと、すっかり脱帽しております。

ただし残念ながらこういう姿は現代の日本には消えつつあります。われわれの周りの町の中でこのごろ聞こえなくなったのは、「ありがとう」という言葉と「ごめんなさい」という言葉です。

人は絶えずぶつかるので、昔はすぐにぶつかったら両方が同時に「失礼しました」といいました。モースが見た日本人は、私にとっては昭和三十年代まではいたはずだと。『ALWAYS三丁目の夕日』に描かれた。あの頃まではあったはずだと。

しかし、いつの間にか経済優先万能主義で、日本人の誇るべき精神が消えていきつつあるように思われます。モースの言葉というのを、今度はわれわれが考えなければいけない。つまり、今度は現代人としてのわれわれ日本人が、この船頭さんや車夫さんたちの行為を見つめ直さなければなりません。

この方々は、何も明治五年の学制頒布の、「邑（むら）に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す」なんていう、その近代教育のおかげでみんなジェントルマンになったかというと、そんなばかなことはない。十二、三歳の人が、人力車を引いているわけはないのですから。

考えてみれば車夫さんも船頭さんも、江戸時代に生まれて、江戸時代の家庭に育って、江戸時代の地域に育って、江戸時代の寺子屋に通って、そして人格形成ができた人たち。この人たちが、明治の初めにモースと対面しているわけです。そこに、幕末の江戸というものすごさといいますか、

改めてわれわれは考えなければいけないだろうということです。

(2) 人にやさしい　もてなしの心

a 江戸っ子の人気（じんき）

同じようなことで、これは外国人ではなくて日本人ですが、和歌山の人が江戸へ来て、江戸っ子の悪い面といい面とを書いている。

それが『江戸自慢』という随筆ですが、江戸っ子の人気（じんき）つまり気性はものすごく荒々しいと。すぐ、「何言ってやんでえ」とかやると。

> 人気の荒々しさに似ず、道を問へば下賤の者たり共、己が業をやめ、教えること叮嚀にして、言葉のやさしく恭敬する事、感ずるに堪たり。
>
> （『江戸自慢』）

何か非常に粗暴な感じの職人さんや何かだけれども、道に迷っている人、つまり弱者、困った人を見たとたんに、ものすごく優しくなるというわけです。

あしたまでの納期かも知れぬ品を一生懸命作っていて、本当を言えば「恐れ入りますが」と道をと聞かれても、そんなことに答えている暇はない。にもかかわらず、聞かれればちゃんと顔を見て「そこへ行くには右へ一丁ばかり行って」と丁寧に教える。分からないと、店の前まで出てきて教えてくれる。もっと分からなければ、そこへ連れて行ってくれるというのが江戸っ子でした。威張る人、たとえば、お侍には江戸っ子はものすごく歯向かうわけですよ、だけど、困った人、弱者にはそうではないということです。

b 無人販売

> 江戸では、人が足繁く訪れる場所、寺の境内などの壁や垣根のそばおよそ二フィートの□の箱がよく置かれている。そこではさまざまな小間物の必需品、楊枝などが、しっかりと値つけて販売されているが、売り手はいない。客はなんでも好きなだけ手に取り、お金は足元にある小さな引き出しの中に入れる。世界で最も人口の多い都市の一つがこうである！　この商売は貧しい家族、貧しい人々を支えるために、すべての町人たちとの信頼により成り立っている。
>
> （『シーボルト日記』）

これはシーボルトという、有名なシーボルト事件を起こした人が年取ってから、開国してから再び日本へやって来て、そして二年半ほど居るんです。その間に、記したのが『シーボルト日記』です。

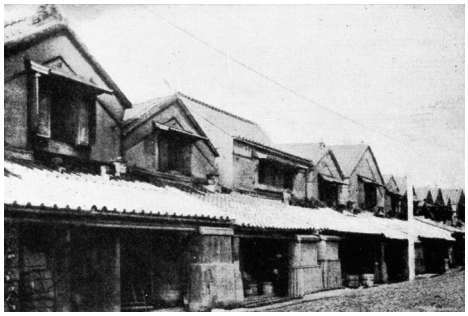
無人スタンドで売っている。そして、じっと見ていた。よほど、シーボルトも暇で見ていたのですね。あの品物を持っていくやつはいるかなと思っていたら、持っていかないんですね。下に、お金が入っている引き出しがあっても持っていかない。そして、売り手がいないのにみんなが買っているわけです。

例えば櫛も売っている。櫛は持っているけれど、この人はたぶんここに立っていないということは、介護するお年寄がいるのだろう。あるいは、本人自身が病気でここにずっと立っていられない人かもしれないという慮りがあって、江戸の人たちあるいは観光客でも、集まった人たちがそれを買ってくれていると。そして、誰も持っていかない。そして、夕方に本人が現れて持って帰る。

こういう商売が百万都市という江戸の盛り場で成り立っていることに驚いている。うっかりすると盛り場には泥棒がうようよいるような所に相違ないと。ヨーロッパなら、こんなものはたちまち持っていかれちゃうというシーボルトの考えとは別に、日本の江戸の町の治安の良さとか、幕府は、その当時は福祉政策などやりませんから、それなら共助でお互いに助け合おうではないかという信頼関係の上で、この商売が成り立っていることに敬服しているわけであります。

・私の夢―樽廻船で灘の生一本

私は、実験歴史学というものをやりたくて仕方がなくて、一番やりたいのは樽廻船という、酒をもっぱら大阪から江戸まで運んだ廻船を造ってもらいまして、そして、本当に灘の生一本をたる詰めにしまして、どんぶりこ、どんぶりこと、ちょうど1週間ぐらいで、いいあんばいのときに新川の酒問屋のところであがって、それを鏡割りして飲んだらうまいだろうなと。この実験をしたくてしょうがないのですが、まだ誰もスポンサーが付いていないのです(笑)。



江戸の日本橋界隈

この実験歴史学から言わせれば、無人販売と同じようなことを渋谷の盛り場とかに置いておいて、ずっと見ていって「どうするかな」とやりたいのです。江戸時代通りにいけば、「ああ良かった、この実験は」ということになりますが、逆の予想が高い、たちまち品物はなくなる、お金はなくなるというのでは現代は江戸にも劣るということになるので、これをやらないままでいるのです。

6　ものづくりの都市―「江戸みやげ」―

a完成度高かった工芸品

最後に魅力ある都市づくり、これからの東京をどうするのかというときに、当たり前のことですが、江戸時代には江戸土産といいまして錦絵がばかに売れたのです。あれは、みんな観光客が地方へ持って帰るために役者さん、相撲さん、美人だけではありません。風景画、江戸を描いた名所江戸百景というものも江戸へ来られない人が、何も江戸っ子だけが買っているのではなくて、むしろ外の人が江戸土産として買っていってくれるわけです。だから、風景画がたくさんあったわけです。

値段がたいへん安かったのです。一枚十文、二十文ですから、立ち食いそば一杯分のお金です。立ち食いそばは、大体十六文で、今で言うと二〇〇円とか二五〇円で浮世絵が買えたわけですから、きわめて安価なおみやげです。

でも、技術がすごいのです。産業革命を知らないで五十年間、世界でも手業だけが発達しました。幕末になると、外国人が来たら日本人が作る工芸品にびっくりするのです。例えばシュリーマンという人ですが、これはトロイの遺跡を発掘した人です。「もし文明という言葉が物質文明を指すなら、日本人はきわめて文明化されているといえるだろう。なぜなら日本人は、工芸品において蒸気機関を使わずに達することのできる最高の完成度に達しているからである」と。日本人の手業は、世界最高の極致にまで達している。

現在はコンピューターを使っていますが、それにもかかわらず、例えば大田区とかの下請けの工場の社長さんといっても親方ですが、あの親方の手でなければこのねじは駄目だという、宇宙に飛んでいるそのねじが、そういう江戸の伝統を持った親方の手業によってつくられている話があります。そういうことを考えますと、江戸の幕末の工芸はすごいといわざるを得ません。

江戸みやげは江戸文化を代表する錦絵でした。これからの東京には東京文化を代表するようなものづくりが必要でしょう。

b完璧な手工技術

ペリーが日本にやって来たときにこういうことを言いました。

> 実際的および機械的な技術において、日本人は非常に器用であることが分

かる。道具が粗末で、機械も不完全であることを考えれば、彼らの完璧な手工技術は驚くべきものである。日本の職人の熟達の技は、世界のどこの職人にも劣らず、人々の発明能力をもっと自由にのばせば、最も成功している工業国民にいつまでも遅れをとることはないだろう。人々を他国民との交流から孤立させている政府の排外政策が緩和すれば、他の国民の物質的進歩の成果を学ぼうとする好奇心、それを自らの用途に適用する心がまえによって、日本人はまもなく最も恵まれた国々の水準に達するだろう。ひとたび文明世界の過去および現在の知識を習得したならば、日本人は将来の機械技術上の成功を目指す競争において、わがアメリカの強力な相手になるだろう。

『ペリー艦隊日本遠征記』

事実、日本は「アメリカの強力な相手」になったわけです。それを、嘉永という江戸の幕末にやって来たペリーが、日本の将来を予感しているわけでありました。

7　江戸から学ぶ魅力ある都市づくり

以上、いわゆる魅力ある都市づくりというものを江戸からどう学ぶか。基本的に美しい景観とかいろいろありますが、やはり心が一番大切だと。おもてなしの心といいますか、住民の気持ちがやはり魅力ある町にする。

最後に、これは我田引水になりますが、江戸東京博物館で私はここ二年ほど、3S方針という運営方針を掲げております。この三つのSの一つはsafetyで、安全・安心の博物館で、魅力ある博物館はまずセーフティーでなければいけない。

二番目のSはserviceです。サービスというのはおもてなしの心で、相手を思いやる心優しい博物館ということです。身障者の方にも外国人の方にも、どなたにも優しい博物館で、サービスの行き届いたおもてなしの博物館ということです。

三つ目はsense of wonderで、つまり感動する博物館ということです。博物館の究極は、博物館をごらんになって出て行くときに、ある感動を覚えていただくことが一番理想ではないかと思っております。

この3S方針を掲げておりますが、このことはよくよく考えると、博物館の運営に限らないのではないか。つまり、魅力ある都市というのは、安全・安心の町ということが一つです。そして、思いやりとか、その町に来た人に対して他者を大切にするというおもてなしの都市であることです。

最後の三番で、やはり感動する都市で、見学に行って「うわ、すごい」というものを持つ都市で、この三つのSの都市が魅力ある都市として発展できるのではないかということを最後に申し上げまして、終わりといたします。

○会長挨拶

竹内先生、本当に大変素晴らしいお話をいただきましてありがとうございました。最後には、都市のあり方にも触れていただきましたけれど、江戸から東京へ、この東京がこれからも本当に安全かつ思いやりの都市であり感動の都市になること。これは大きな課題だと思いますが、それにふさわしい都市になるよう、私どもは大いに期待してまいりたいと思います。

先生、どうもありがとうございました。

（注）写真と挿絵は編集部で入れたものです。